

連鎖する語り

甲 田 直 美

1. 語りの研究

人々が一定のまとまりをもって語る物語には、定型化され形の整えられた創作物や出来事の実験談など、さまざまなものが含まれる。物語は、文学、言語学、哲学、心理学、人類学など多くの学問分野で扱われてきた。それらの中には、自叙伝や人々の経験、例えば戦争体験や出産体験などの語られる内容に焦点をおくものや、語られる内容の構造や言語的要素に焦点をおくものが見られる。

本稿では、会話内で自発的に生じた語りの言語構造を観察する。本稿で扱うのは、社会的インタビューのように語る人と語られる人（物語を聞く人）の役割が固定したものではなく、会話場面で語り手が自発的に過去の経験などを語るものである。会話の中で生じた即興的物語を、文学作品等のあらかじめ準備された「物語」と区別して、以下、「語り」と呼ぶ。

会話が盛り上がる際に、語り手が語りを生むかのように別々の話者が交互に経験談を披露していくことがある。これとは逆に、ある会話参加者が一定の長さの話を語っても、たいして会話が盛り上がりせずに終わることがある。本稿では実際の会話をビデオ録画し、やりとりを転写して詳細に分析することにより、話がはずみ、盛り上がった部分で何が起きているか観察する。

相互作用のある会話のなかで語り手がどのように語りを開始し、会話参加者はそれをどう受け止めるのかについては、会話分析の分野において研究の蓄積がある。本稿では、2つ以上の語り連鎖して生じる場合に注目し、これまでの会話分析の知見を確認しながら分析を提示する。

語り連鎖するとき、前の語りについて生じた語りを Sacks (1992) にならって第2の語りおよびたい。連鎖する語り（第2の語り）は、Sacks (1992) が述べるように、第1の語りに関連のあるように会話参加者によって組み立てられている。このことから第2の語りを観察することで、会話参加者がどのように第1の語りを理解したかを伺い

知ることができるであろう。どのように2つ以上の語りが連鎖しているのか、第2の語りはどのように開始され、どのように終結するのか、これまでの会話分析の知見から観察する。

本稿で注目するのは、語りの共有／非共有と、Mulholland (1996), Karatsu (2012), Szatrowski (2010) のいう連帯意識、すなわち、会話参加者がどのように語りによって自分の立場を確立していくかという点にある。会話参加者の連帯意識を高めるための、語りの共有の仕方の一つの方法として、他者の語りにそれ相応の語りを連鎖させることが行われている。

2. 会話内で生じる語り

2.1 現象

断片(1)は、甲田(2014)で論じた断片(01Aから09A)とその後続する部分である。甲田(2014)では語りの開始から盛り上がり、そして終結へと進むプロセスについて論じた(2.2節でその概要を示す)。

話者Aと話者Bはともに女性で友人同士である。03Bから07Bの発話においてもっぱら話者Bが先輩の家のテレビが地震で落ちて壊れた話を語っている(転記記号については章末に示す。→は注目行、枠囲いは語りの冒頭部分の発話を指す。以下の抜粋も同様とする)。話者Bが語っている間、話者Aは相づちや最小限のリアクションにとどめ、実質的発話はいっぱら話者Bによって語られる。このように語りは、複数のTCU(Turn Construction Unit)からなる発話順番が組み合わされて成立している。

この断片では、2つ以上の語りが連鎖している。ここでの話者AとBは次から次へと経験談を披露し、ときに大爆笑(笑いをhで表記)を繰り返しながら会話は展開していた。本稿で観察したデータには、2011年3月11日に同じ仙台市内でそれぞれ別の被災経験をした内容が含まれている。まず話者Bが03Bから先輩の家のテレビが地震で落ちて壊れた話を語った後、続いて同じ話者Bが09Bから「も:もっとひどいのは:(.) その知り合いで:<買い換えた>且に地震で:=」とさらにひどい話を語る。そしてその後、別の話者Aが17A「[そうそうそう.] [そう(.) なんか(.)]」と自身の電子レンジの保証が天災では効かないという話を語る。会話参加者は、震災の経験を語る時、当時の失敗談や笑い話を語る時には、同様の話を連鎖させて別の話者が続けている例がデー

タ中多く観察された。これとは逆に、震災で大丈夫だった話については、ある語りに引き続いて別の話者が経験を語るという現象は見られなかった。

(1) 【断片 1】

- 01A: = そう. だけどちょっと恥ずかしかった. [hhhh
 02B: [hhhhh
 03B: だいじょぶだいじょぶ (.) でもなんか (.) 先輩の家とか: =
 04A: = うん. =
 05B: = テレビがお - おっこちゃって =
 06A: = ° うわ: [えやば°] ((ささやき声に近い))
 07B: [なんか] (.) 左三分の一が真っ暗になっちゃってて: (.) そう (.)
 それでなんか (.) =
 = 古い何位か分かんないとか [hh 言って] hh
 08A: [hhhhhhh] いやいやもっと悩むところあるでしょ hhh
 09B: も: もっとひどいのは: (.) その知り合いで: < 買い換えた > 日に地震で: =
 10A: = え: :
 11B: あの地デジにしたの. [ね]
 12A: [うん] [うんうん]
 13B: [あのブラウン] 管から (.) あの厚いやつから
 薄いやつに =
 14B: = した日に割れ- (.) こう hh おっこちゃっ [て:] 画面 (.) ね? 見えなくなっ
 [て:]
 15A: [え: : :]
 [うん]
 16B: でも地震って結構保証効かない [(.) らしくて:] むだ [金っていうか.]
 17A: [そうそうそう.] [そう(.)なんか(.)] =
 18A: = 生協 [で:] 電子レンジ買ったから生協の保証書見直したら (.) =
 19B: [うん]
 20A: = 天災ダメって書いて [あって:]
 21B: [え: : ダメ] なんだ [やっぱり.]

- 22A: [そう.] だからもういいよって
 思って hhh
- 23 (1.0)
- 24A: まずそんな簡単に [レン] ジ壊れないじゃん? だって普通に [使ってて (.)
 それしか] 保証=
- 25B: [うん] [うんうんう
 ん. そうだね.]
- 26A: = しないって [何 (.) って思って hhh]
- 27B: [hhhhh 確かに.] 確かに. (.) 水没とかありえない [しね.
- 28A: [そうそう
 そう.]

2.2 語りの達成: 会話分析による知見の確認

甲田 (2014) では 01A から 09A に至るプロセスについて分析した。通常の会話では話し手と聞き手はその役割を交替しながら会話は進行する。語り手が一連の長さの語りを語るためには、発話順番のスペースが確保され、一通り話しても良いということが聞き手によって承認されていなければならない。このため、語りを始めようとする者は、語り始める前に、これから何かを語り始めることの承認を得なければならない。そのためには、いきなり語りを語り始めるのではなく、話者 B はその一部を一応不確定の要素のように提示して、相手の承認を得てから話し始めるのである。03B では、これまでの話を「だいじょぶだいじょぶ(.)」と落ち着かせてすぐ「でもなんか(.)先輩の家とか:」と話題を例示し、そしてそれを 04A の「A: =うん.=」と承認を得てから語りに入っていく。この後、話者 A は語りの進行中、受け手として語りの受領、一致、承認を示すのみで実質的ターンをとらない。これは、語り手が継続してフロアを占め、語りが行進中であるという受け手の理解を表示し、語りの行為の構造的非対称 (Stivers, 2008; Jefferson, 1978; 串田, 1999) を示している。語り部分の受け手による相槌、短い叙述、明確化要求などの back-channel (Yngve, 1970; Duncan, 1974) は、語り手がフロアを支持していることを示す (Edelsky, 1981) といえる。フロアとは、主たる話し手が継続する現象を指す概念であり、ターンを有する場合でも相槌や短い叙述などの back-channel に留まる場合はフロアを有しているとは考えない。相槌などとは異なり、

語り手が語り内の事象を語る場合や、受け手がその語りの終結を受領する時に自らのスタンスを明示する場合には具体的な表現を用いるが、これを実質的発話とよぶ。

甲田 (2014) で示したように、会話分析 (Conversation Analysis, CA) 研究者によれば、語りは、原則として話のかたまり (block of talk) などではなく (Jefferson, 1978 : 245), 会話内で語り話が話されることは話し手と聞き手との相互行為による「達成」と捉えられ、データは、どのように話が話者によって完成されたかが調べられる (Mandelbaum, 1987 : 148)。

07B の発話「[なんか](.)左三分の一が真っ暗になっちゃってて:(.)そう(.)それでなんか(.)占い何位か分かんないとか[hh 言って]hh」において、当時の部屋の強調された描写の時点で、これまで語りの受け手であり、相づちのみであった B が 08B 「[hhhhhhh] いやいやもっと悩むとこあるでしょ hhh」と実質的発話で確認を行う。このような実質的発話量の偏りは「語り手が継続してフロアを占め、語りが進行中である」という受け手の理解を表示し、構造的にも語りの行為の非対称 (Stivers, 2008 : 34) を支持する。

03B から 07B における語りでは、語りのクライマックス部分 07B に思考や発話が提示 (Holt, 2007) され、これによって語られるエピソードの臨場感が高まり、描写のきめ細かさ (Schegloff, 2000) が増し、語りの終結へと結びついていく (甲田, 2014)。ここでいうクライマックスとはハイポイント、話の盛り上がりともよばれる。その後の会話分析の研究によれば、クライマックスは単に内容的盛り上がりだけではなく、クライマックスに反応する聞き手の行為によって確認することができる。クライマックスの後、これまで相づちなどの非実質的発話にとどめていた受け手が実質的発話を発するタイミングから 08A の直前にクライマックスが訪れたと考える。

語りが達成されていく中で、クライマックス部分に思考や発話を提示すること (07B) で、語られた当時の状況が再現され、話が盛り上がっていったことが語り部分の受け手 08A との笑いの共有によって確認される。しかし、すべての語りがクライマックスを持つとは限らず、相手との共有を得られないまま、淡々と次の話へ移行することもある (第 5 節【断片 3】参照)。【断片 1】では、この後、同じ話者 B が似たエピソードを語り、その後これまで受け手であった話者 A が近似のエピソードを語る。本稿で注目したいのは、このように他者の語りを受けて連鎖する語りである。

2.3 後続する語り

話者 B は先輩の家のテレビが落ちて壊れたという第 1 の語りの後, 09B 「も:もっとひどい」という第 2 のエピソードを続ける。そのエピソードは, テレビを新しく買い換えた, その日に地震で壊れてしまったというものである。その後, これまで 2 つのエピソード中, 語りの受け手であった A が自身が買った電子レンジの保証について憤りの話を 17A 以降, 語り始める。17A: 「[そうそうそう.] [そう(.)なんか(.)] 生協 [で:] 電子レンジ買ったから生協の保証書見直したら(.)」と始まる話者 A による語りは, 電子レンジの故障の保証について, 天災によるものは保証されないというものである。ここでの話者 A が「そうそうそう」と話を開始することは, これまでの話者 B の語りに同意し, 自らも同様の経験を語ることで経験を共有し, 連帯感を強めるのに役立つ。

Mullholland (1996) では, 職場の休憩時間に仲間同士で交わす会話において, 語りの提示が連帯感を強める重要な役割を担う様子を描いている。簡単な語りを提示することは自分を気軽に開示でき, 社交性を損なうことなく経験を共有することができる。語りが正しく受け取られれば, 他者の語りを導くのものにも使える。次の人が入ってきやすい, 介入しやすい語りを提示することにより, 相互に会話を展開していくことができる。

この抜粋では話者 A が「そうそうそう」と自身の経験の中から賛同する経験を取り出してきて話者 B の語りの後に配置することで, 話者 B の話を置き去りにすることなく, 受け止めることができる。後続する語りの語り手は, これまで他者によって語られた語りが, 特異で共感が持てない話でもなく, ありきたりのつまらない話でもなく, 共感や興味を持った話だということを後続する語りによって示すことができる。

17A による電子レンジの保証の話は, 前の語り (テレビが壊れた話) と同様に, 電化製品で困った話として適切に思い出され, つながるものとして語られる。これは Sacks (1992: 1995: 765-772) のいう「第 2 の物語」というものである。類似した経験を語ることにより, 前の部分の他者による語りを語り手が正しく理解したことを示している。

会話参加者による当人たちの理解 (Sacks, Schegloff and Jefferson, 1974: 729) が会話参加者の語る第 2 の物語によって示され, その第 2 の物語が違和感なくその聞き手に受け入れられるということは, これらの 2 つの話は正当な手続きによって連鎖しているのであり, 観察者にとっても利用可能な, データに内在する証明手続き (Ibid.: 729) となる。

語りを開始する正当な理由付けや, 第 2 (以降) の語りが前接する語りにどのように

位置づけられるか、語りが連鎖する場合にどのようなつながりで連鎖するのかを見ていく。

3. データ

1組2名から3名、計8組による会話（話者の平均年齢21歳、年齢幅19-32歳）合計518分（8時間38分）を対象とした。このデータ中、「語り」は208カ所見られ、そのうち、他者の語りに連鎖して開始される語りは24見られた。【断片1】の09B~16Bにあるような、ある一人の話者が自らの語りに継続して次の語りを開始するものは、フロアが継続しており、含めなかった。

データ全体のうち、2組は自由会話（雑談）、6組は2011年3月に発生した東日本大震災の体験談と雑談を含む会話である。防音室でICレコーダーとビデオカメラによる録画・録音が行われた。収録は2011年6月から7月に行われた。話者は仙台市在住で地震を経験しているものの、終始笑いと興味を持った会話で、自然な友人同士の会話であった。震災の被害の大きさから倫理面について言及する必要があると思われる。本データの会話は震災を経験しているものの、被害は限定されており、本稿に挙げた断片が示すように、笑いの中で、お互いの体験を披露しあう会話に傾いていた。話者は体験やそこから思いついたことを相互作用の中で自由に語り、食べ物の好みや自炊生活など、話題が発展していく様子を含んだものである。

本稿で挙げる【断片1】【断片2】【断片3】は同一の2人会話（女性同士）から採っている。2人とも仙台市内で別々に震災を経験しており、共通する体験を連鎖して語っていた。

4. 連鎖上の正当性

Ryave (1978) は2つ以上の語りの連鎖は特別なものであるとして、それぞれの話は潜在的にトピックの志向として関連づけられていることを指摘している。それによれば、会話参加者は連鎖上での正当な地位を得るために注意深く聴いて、続きの話として観察可能なように組み立てている(121)。4節では、会話参加者が前の話と同様なものと分かるように組み立てられていること、そしてそれぞれの体験を共有しようとする過程を

観察する。

4.1 潜在的トピックの志向

【断片 1】では、話者 B による 2 つのテレビの損壊のエピソードに対し、話者 A は 17A 「そうそうそう. そう(.)なんか(.)」と「地震では保証が効かないことに応答の「そう」を繰り返すことで強く同意し、最後の「なんか」以降、自身の語りを語り始める。

(2) 【断片 1】の部分再掲

16B: でも地震って結構保証効かない [(.) らしくて:] むだ [金っていうか.]

17A: [そうそうそう.] [そう(.)なんか(.)] =

18A: =生協 [で:] 電子レンジ買ったから生協の保証書見直したら (.) =

19B: [うん]

20A: =天災ダメって書いて [あって:]

21B: [え::ダメ] なんだ [やっぱり.]

「なんか(.)生協で:」以降、展開される語りは、震災と電化製品にまつわる苦労談として前の話と共通している。しかも、「でも地震って結構保証効かない」ことへの同感を示すものとして、相手のテレビの保証に対して自分の電子レンジも保証が効かないことを述べるのである。前節で述べたように、前の部分の他者による語りを語り手が正しく理解したことが、強い同意の後に適切な事例として披露される。語りの連鎖は次の(3)のようになっている。

(3) 【断片 1】における語りの連鎖の概要

第 1 の語り 1: 話者 B による友人のテレビが落ちて壊れた話 1 損害と冗談

第 1 の語り 2: 話者 B による友人のテレビが落ちて壊れた話 2 損害とその保証

第 2 の語り: 話者 A による電子レンジの保証が効かない話 損害とそれへの憤り

第 1 の語り 1, 2 は同じ話者 B によって語られた話で、それぞれ友人のテレビの被害についてであり、その後、話者 A が自身の経験から同様の話を提示することで話者 B の話の理解と共感を示している。相手の話への共感を表す方法として、「わかる」など

の理解していることを示す方法があるが、この他に、自分の経験を開示することによって相手に共感を示す方法がある。自分が経験したことの中から相手の話と同じような経験を選び出して語ることにより、相手に共感を示すことが出来る。しかも、第2の語りでは単に同様の経験を並べているのではなく、語り部分が意図するもの、例えば話者Bによるテレビが壊れた損害とそれが原因で困ったということに対し、話者Aは自分の過去の損害とそれへの憤りを語ることによって、相手の話の意図を的確に理解したことが具体的な語りとして示され、感情を共有している。第2の語りは単に他の誰かの電化製品の保証の話ではなく、語り手Aによる自身の体験談と経験からの感情を伴うものである。第2の語りは、単に第1の語りを模したのではなく、Mulholland (1996) の言うように少し異なっていて語る価値のあるものである必要がある。

4.2 近似のパターン

【断片1】では、Aの語り、Bの語りともに、次のような近似のパターンをとっている。甲田(2014)で示したように、そもそも語りのクライマックス部分に思考・発話を提示することは頻繁に行われるのだが、ここでも次のような近似のパターンとなっている。

(4) 語りの開始→思考・発話の提示→終了

語りのクライマックスに思考・発話を提示することで、当時の状況をありありと再現しドラマ性を高め、それが経験の共有となり終結につながることについては甲田(2014)で検討した。【断片1】では、Bの語りとそれに続くAの語りではそれぞれ次のように(5)「言って」、(6)「思って」と語られる当時の状況をありありと再現している。どちらも補文構造を採る動詞であり、(5)では当時の発話を、(6)では当時の感情を提示している。

- (5) 07B: [なんか] (.) 左三分の一が真っ暗になっちゃってて: (.) そう (.) それでなんか (.) 占い何位か分かんないとか [hh言って] hh (断片1・第1の語り・部分再掲)
- (6) 24A: それしか] 保証しないって [何 (.) って思って hhh] (断片1・第2の語り・部分再掲)

形式的にも、補文構造をとる引用・思考動詞をクライマックス部分に配置するという近似の、同様のパターンによって連鎖している。このことは形式的側面や構造における近似性だけではなく、前節で述べた連鎖する語りとしての正当性、特に価値の連鎖によって支えられている。正当に連鎖すべき体験の強烈さを印象づけるものとして、効果的な表現が選ばれているのではないだろうか。語りは Labov (1972) にあるように、評価やクライマックスといったハイポイントを中心に形成されるが、ここでの語りの連鎖もまた、その意図するところ、顕著さの観点で繋がっている。

4.3 強い同調

次の抜粋は先の抜粋と同じ話者 A, B によって語られたもので、ここでも語りは連鎖している。話者 A の 04A [でなんか] (.) <お母さん>なんか:]以降、鍋が腐った話 (第 1 の語り) に続いて話者 B が 29B [なんか友達もカレー作って:]以降、カレーが腐った話 (第 2 の語り) を続ける。どちらも、ひどい状態の形容が「強烈な話」として語られる。

(7) 【断片 2】

- 01B: [え] 実家: じゃず (.) 一ヶ月くらいおば: ちゃんちいたってこと?
- 02A: そうそうそう.
- 03B: ふ: ん [そ: なんだ].
- 04A: [でなんか] (.) <お母さん>なんか:] =
- 05B: = うん =
- 06A: = 鍋を作っ - (.) 作って食べかけの鍋そのまま残して: [実家から] 帰って来たらしくて: =
- 07B: [hhh]
- 08A: =h なんか (.) お父さんは: 茨城の: (.) 水戸↑ (.) よりも (.) ま (.) > 車で一時間ぐらい<のところで =
= 単身赴任してんだけど: =
- 09B: = うんうん . =
- 10A: = なんかそれで水戸にお父さんは °あ° の (.) 一回帰って来たんだよ (.) [で土日に].

- 11B: [う
んうん] > うんうんうん <.
- 12A: で (.) 一回見て [くれ] ってお母さんに言わ [れ] て. =
- 13B: [(鼻をすする音)] [うん].
- 14A: = で (.) お父さんは (.) ずっと茨城に残ってるから. =
- 15B: = はいはいはいはい. =
- 16A: = 仕事で (.) でなんか (.) そしたらなんか (.) 部屋の中が尋常じゃなく臭かつ
たらしくて=
=さ: [(.) 一か h 月 h さ: 鍋] (.) =
- 17B: [え: : : ↑ (.) 鍋のせいで: ?] (.)
- 18A: = 鍋 h を h. =
- 19B: = え (.) ちっと (.) き - カビとか: : =
- 20A: = そ: なんか (.) 鍋腐ってて:
- 21B: んまるごと捨て [るよねそしたら:].
- 22A: [す - (.) そ:]. すごいやばかつ h た h ら h し h く h て h.
- 23B: 見たくないよ [ね:].
- 24A: [そ h: h]. h (.) お父さんかわいそうだな: そんな [処理を] (.)
- 25B: [え (.)] 蓋
してなかった (.) ° 蓋して (.) た h の h か h な h: h°
- 26A: しと -h [hhh].
- 27B: [そこ大事] だ h よ h ね h. 蓋があるかない [かですご] い.
- 28A: [そ: :].
- 29B: なんか友達もカレー作って: .
- 30A: うんうん (1.0) やば [カレー-] ? カレーやばっ. =
- 31B: [蓋して: .]
- 32B: = うっかり: . (.) [その] まま: [(.)] 出てきたら h し h く h て h (.) > 水道
出ないから: <=
- 33A: [うん.] [うん.]
- 34A: = あ: あ: うん. =
- 35B: = とりあえず中捨てるにも捨てれ [なくて.] なんか結 h 構 h (.) 残ったま h

ま h (.). h 実家 =

- 36A: [うんうん].
- 37B: = 帰っちゃったらしくてそれで二か月くらいいたんだって.
- 38A: あっはっは.
- 39B: 帰ったらな h ン h か. (.) カレー見えなくなっ [て h て hh] =
- 40A: [あ hhh] h.
- 41B: = カビが hhh (.) ふわ: : ってなって [て丸ごと捨てたって言って] た.
- 42A: [く - うお: ↑↑ (.) や↑ば↑い].
- 43B: . h (.) 怖いよね: : .

話者 A は 04A 以降, 母親が震災前に作った鍋をそのままにして避難した話を語る。この語りは, 16A の「でなんか(.)そしたらなんか(.) 部屋の中が尋常じゃなく臭かったらしくてさ: [(.)一か h 月 h さ:鍋](.)」に至るまで, その経緯が段階を追って語られる。04A から 16A までの間, 経緯とともに十分な間をもって語られ, 16A に至って, 「でなんか(.)そしたらなんか(.)」と言葉探しのよう山場にためを作って「尋常じゃなく」の部分が強調され提示される。この話者 A の 16A の発話において, 当時の部屋の描写が強調された時点で, これまで語りの受け手であり, 相づちのみであった話者 B が 17B 「[え::↑(.)鍋のせいで:?(.))」と実質的発話で確認を行う。このことから, 話者 B はこの前の 16A の発話が語りにおける盛り上がりであり, 語りの内容を共有する立場にたったと判断したことが分かる。そしてこの後実際, 17B から 28A まで A と B は当時の様子や鍋に蓋をしていたかどうかについて語っている。このことから, 16A の発言の後, 受け手 B による当時の情報へのアクセスが可能な状態になったことが分かる。語り手と受け手との鍋の強烈さへの笑いとの共鳴によって, この語りは終結する。この語りがいったん終結することは, 29B: 「なんか友達もカレー作って:.」と次の語り開始されることで分かる。次の語りの開始は語りに区切りが付いたという認識を, 語り手 B と受け手 A が共有したことに基づいている。語りの開始と同様, 語りの終結も協働して達成される。

第 1, 第 2, どちらの語りも, 開始部分で話の概要が語られ, それに反応した聞き手が概要を理解したことが示されている。第 1 の語りでは 06A の「食べかけの鍋そのまま残して:」の後で, この部分の語りの受け手 B は笑い, どのような話か (すなわち, 笑っ

てよい話)を把握して反応している。

第2の語りでは29B「なんか友達もカレー作って:」に対して、Aは30A「うんうん(1.0)やば[カレ-]?カレーやばっ。」と「やばい」の形容詞語幹「やば」と語りの概要を受容したことを示している。

後続する語りは、前の語りへの同意や、前の語りの話者への共感を示すものであるが、同意、共感を強調するために、第1の語りに劣らないように、第1の語りに正当に匹敵するような体験として語られている。このことは、同意を表す際に応答の言葉が1回だけでなく2回以上繰り返されて使用されることに似ている。「うん」ではなく「うんうん」、「そう」ではなく「そうそう」といったように。32B「>水道出ないから<」35B「とりあえず中捨てるにも捨てて[なくて.]」と困った状況が語られ、35B「なんか結構残ったま(.)残ったま(.)残ったま(.)」と「結構残ったまま」と程度が強く示され、35B「実家帰っちゃったらしくてそれで二か月くらいいたんだって。」と2ヶ月も期間が空いたことが示される。

第2の語りでは、39B~41Bで当時の状況が段階的に語られる。39Bの「なんか(.)」以降、言葉探しの後に強烈さが提示される。このクライマックス部分には、39B以降、「帰ったらなんか(.)カレー見えなくなっ[ててhh]カビがhhh(.)ふわ::ってなって[て丸ごと捨てたって言って]た。」とカレーが見えなくなっていたこと、カビの形容が擬態されて提示される。連鎖する第2の語りは、第2の語り手がどのように前の話を聞いたかが示される。第2の語り手が同調し、同様のエピソードを語ったことで、強い興味と関与を共有しようとしたことがうかがえる。もし、とりたてて興味を引く内容でなければ、自身の経験の中から共鳴するような体験を引っ張り出して語りとして連鎖させて披露することはなかったであろう。

語りの開始部で、話の概要が語られることや、クライマックス部分でそれにふさわしい言葉が探されて提示されるなど、語り一般にしばしば見られる特徴ではあるが、この事例でも、第2の語り手は、第1の語りにふさわしい続きとなるように近似の語りとして組み立てている。2つの話は、語り手が意図し示唆する性質を同じくしており、強烈さを示すことが意図的に構築され、続く語り手は顕著さの観点を使っている。事象の記述的説明ではなく、志向するトピックとして同等のものとなるようになっている。Ryave (1978) が述べるように、語りは~すべき、公理、ことわざ、ルール、主張などの形を採り、同様のものとなるように組み立てられている。会話参加者は注意深く聴い

て、続きの話として観察可能なように組み立てている。

他者の語りに後続する語りは、後続する語りの語り手の理解を示すものである。話のかたまり (cluster) としてつながっているのではなく、語りの構成、開始からクライマックスを共有するまでの発話の連鎖の仕方が精巧に組み立てられている。

5. 語りの共有と非共有

連鎖して語られる第2の語りは、連鎖にふさわしい話として語られていることを4節で述べた。5節では、2つ以上の語りが連鎖する場合に、語り手と感情を共有するか否かで、どのように連鎖が異なるか示す。

本稿データには含めていないが、筆者が震災後、仙台市内のレストラン等で傍聴した限りでは、会話者全員が震災を経験している場合には、体験を披露しながら盛り上がっていたが、震災を免れた会話者がいる場合には、その話者はもっぱら体験の聞き役となり、会話は震災の悲惨さの話へと進んでいた。このように震災の話が感情の共有にならずに報告調になる場合と感情の共鳴になる場合があることについては甲田 (2014) で述べた。ここでは、なぜそのような差となるのか、共有される場合とされない場合について観察する。語りが笑いの共有となる場合、まず語りの開始部以降、どのような語りか、すわなち、その語りを聞いて笑っていいのかしんみりしたらよいか分かるように語り手によってその語りは示されており、もし受け手もこれに共感するならば共有される可能性が高いことになる。共感する箇所がさして見当たらない場合には語りはいくつも連鎖することはなくなる。震災の話をする場合にしんみりするかどうかは被害の大小というよりも、語り手の提示の仕方と受け手の共感に関わっている。

5.1 交替連鎖、自己連鎖

本稿で扱っているのは、他者の語りに連鎖する語りである (これを交替連鎖と呼ぶ)。交替連鎖は【断片1】の話者Bから話者A、【断片2】【断片3】が該当する。交替連鎖の観察では、会話参加者が連帯感や距離をどのように演出しているかをうかがい知ることができる。

この他に、話者が語り、いったん語りの終結が会話参加者同士で共有されたあとで、引き続き第1の語りの話者が第2の語りをする場合もある (これを自己連鎖と呼ぶ)。

この場合には、同一の語り手であるから、第 2 の語り手がどのように第 1 の語りを受け止めたかという議論にはならない。

自己連鎖の事例としては、【断片 1】のテレビが落ちた話で、話者 B が先輩の家のテレビが落ちた話に引き続き、09B 以降、「も:もっとひどいのは:(.) その知り合いで; 買い換えた日に地震で:」とさらなる語り続ける場合である。第 1 の先輩の家のテレビの話は、甲田 (2014) で述べたように 09B のように「左三分の一が真っ暗になっちゃって:そう(.)それでなんか(.)占い何位か分かんないとか[hh 言って]hh」と面白おかしく、テレビが落ちた被害とテレビ番組に出てくる占いの場面の話とに結びつけ、発話引用の形で提示している。この部分の語りは、語りの受け手 A によって正当に 08A「[hhhhh] いやいやもっと悩むところあるでしょ hhh」と突っ込みを入れられ笑いで終了している。そして 09B 以降、「も:もっとひどいのは:(.)その知り合いで;」と同様の、そして「もっとひどい」エピソードとして語られる。この場合は、同じ語り手 B によって 2 つの語りが語られている。

5.2 共感と対比

【断片 1】【断片 2】では、前の話に共感する話が第 2 の語りとして語られていた。しかし、すべての語りが会話参加者の共感を生むわけではなく、感情を共有しないまま淡々と終わる場合もある。

次の【断片 3】では、共感ではなく第 1 の語りに対比的な話として連鎖している。第 1 の語りは、話者 B によって 06B「私何にも用意してなくて:」以降、これまでの地震では被害がなかったため、何も用意していなかったことへの後悔が語られる。これに続く 17A「でもなんかうち[すごい]よかったのが:」以降の話者 A による第 2 の語りは、「でも」で対比されているように、第 1 の語りとは対比的に地震のエピソードの中でも良かった経験が語られる。

(8) 【断片 3】

01A: なんかいざ地震なって (.) つけるか (.) って思ったら電池切れて [んの、
hhhh].

02B: [hhhh.
使 h え] h な h い h.

- 03A: そ (.) 全然使 h え h [な h い h].
- 04B: [使えない].
- 05A: °つか-°
- 06B: 私なんにも用意してなくて:
- 07A: うん [うんうん].
- 08B: [まさか:] (.) なんか (.) 震度 5: が (.) 一番 (0.5)
[その (.) 前の] 震度 5: が [一番おっきいと]=
- 09A: [うんうん] [うんうんうん]
- 10B: = 思ってたから =
- 11A: = う: ん =
- 12B: = ま: あれでだいじょ: ぶだったから: (.)
- 13A: うん [うんうん].
- 14B: [なん-だい] じょぶだろ: (.) と思っただら: 全然なんかそんなことな
くって:
- 15A: そ: ちょっとなめてた [よね: . [そ h:].
- 16B: [なめてた [よね:]. h.
- 17A: でもなんかうち [すごい] よかったのが: [地震] の一時間前ぐらいに: [おば
あちゃんから:] =
- 18B: [うん] [うん] [うん]
- 19B: = うん =
- 20A: = めっちゃ食べ物入った宅急便届いて =
- 21B: = えよ [かったね]
- 22A: [なんか] < 蒸しパン >> みたいな < (.) サツマイモが入った蒸し [パ
ンみたいなのが] =
- 23B: [は
いはいはいはいはい]
- 24A: = ま: あっちの方で (.) ある (.) 西の方であるん [だけど] =
- 25B: [うんうん] うん.
- 26A: = . h それが ちょ: 大 h 量 h に h 届いて [て:]
- 27B: [あじゃ] しばらく食べ物に困らない

[ってゆ：こと]=

28A:

[そ：そ：そ：].

29B: = でしょ =

30A: でなんか (.) まだ [届いて] すぐだったから：.

31B: [((鼻をすする音))]

32A: べつに：： (.) 冷凍とかしてなかったし：，

33B: う：：ん (.) [そっかそっか (.) よか] ったね：： [.

34A: [な：：んもやってなくて]. [そ：.

35B: 一回冷凍しちゃうと.

36A: ふ-も：： (.)

37B: °ん° (.) めんどくさいこと [にない- (.) からね]

38A: [できないじゃ：：ん]. 電気使えないから.

話者 A は 17A 「地震の一時間前ぐらいに」 A の祖母から 20A 「めっちゃ食べ物入った宅急便届いて.」, 地震の際の食べるものがあつたことが語られる。この第 2 の語りは、この部分の聞き手 B によって 27B 「[あじゃ] しばらく食べ物に困らない [ってゆ：こと] でしょ」と受け止められる。この 2 つの語りは一見、対比的に語られている。それは逆接や対比として使われる接続詞「でも」で開始されていること、そして語りの受け手 B による語りの受け止め 27B 「しばらく食べ物に困らない」ことからうかがえる。しかし、それが運の良いことでそれで助かったのだとすれば、それ以外には特に地震に対して何も準備していなかったという点では話者 A, B 共に共通している。全く共通点のないところから語るよりも、共通性を基盤にして、その中で対比的な出来事として語ることで体験を聞き手に理解できるように語っていると考えられる。また第 1, 第 2 の語りの前の会話では 01A から 05A にあるように話者 A が(懐中電灯を) 01A 「なんかいざ地震なつて(.) つけるか(.) って思ったら電池切れて [んの. hhhh].」と、準備をしていない話を語っていることから、準備をしていなかった話が継続していると考えられる。語り手はこれから語る話がある場にふさわしいものとなるように、前の話がきっかけだったとか、前の話から思い出したなど、何らかの関連をもたせることで語る正当性を示している。

しかしながら、その発話順番で語る正当性を保持しつつも、この語りは次の語りを誘発しなかったことが発話 28A の理解の後、発話 38A に至るまでで観察できる。この部分の受け手 B に受け止められるものの、次の語りはどちらの話者からも開始されず、笑いや感情の共有は見られないまま話が盛り上がりせずに終わっている。

5.3 連帯感と距離感

本稿のデータはインタビューアーの役割が固定した非対称的会話ではないため、自発的談話内での語りを考察し、日常のやりとりの中にあるいくつかのエピソードを埋め込む過程 (Umiker-Sebeok, 1977) や共同成立 (Jefferson, 1978 ; Mandelbaum, 1993)、受け手の反応 (Stivers, 2008) を観察することができる。語りが連鎖する場合には、相手発話の内容を共有するかのようには続する語りの語り手は自身の体験を語っていた。語りが単なる報告の繰り返しではなく、相手の発話に連帯感を示したり、場合によっては距離感を示したりしていた。震災の話では、失敗談や被害については納得や笑いを伴い、会話参加者は連帯感を共有していたが、一方、助かったことや良かったことについては距離感を示していた。このことは、距離感を示す語り (【抜粋 3】) が報告調に終わり、クライマックスを持たない語りの構造をしていること、受け手の反応が単なる受領としての相づちとなっていることから観察できる。

会話の中で会話参加者はどのように連帯を示しているだろうか。Mulholland (1996) が整理しているように、例えば、誰かが話しているときに聞き役に回ることや、テレビや映画などの共通の話題を話すというのも連帯を示す。しかしこれらは本稿の【抜粋 1, 2】で示した連鎖する語りのやり方に比べれば弱い連帯感である。テレビや映画の話と違い、体験談の語りでは会話参加者は自らのものの見方を提示する。連鎖する語りでは語りを受容し、語り続けて語り話すことによって経験を共有するというのは強い連帯感になる。

6. 語りの開始部

6.1 語りの開始部でのスペース確保

第 1 の語りであれば、第 2 の語りであれば、語りを開始するためには語りの開始部は、通常の発話交替をいったんストップさせる必要があり、物語を語るのに十分な長さの発話

機会を得なければならない。(9)に挙げた断片(再掲)での開始部は「[[でなんか](.)<お母さん>なんか:]」となっており、接続詞「で」によって次に発話が続くこと、「なんか」を2回続けることで言葉探しをしていることがうかがえる。語り手がこれから何かを話し始めようとしていることが、次の受け手の反応「うん」によって、会話参加者による理解として確かめることができる。開始部分04Aは誰が話を伝えるかを配置する環境を提供し、これから語るという行為を投射する。04A以降の話題の提示の受領が、05B「うん」で示され、語りの開始が承認される。

(9) (再掲)

04A: [[でなんか] (.) <お母さん>なんか:] =

05B: = うん =

06A: = 鍋を作っ - (.) 作って食べかけの鍋そのまま残して: [実家から] 帰って来たらしくて: =

07B: [. hhh]

このように、語りの開始部では通常の交互に実質的発話が交替していく話者交替システムを中断し、語るスペースを確保する必要がある。これまで挙げた抜粋で語りの開始部分と思われる発話を挙げる。

(10) 【断片1】における3つの語りの開始部分

① 03B: [だいじょぶだいじょぶ (.) でもなんか (.) 先輩の家とか:] =

② 09B: [も: もっとひどいのは: (.) その知り合いで: <買い換えた> 日に地震で: =

③ 17A: [[そうそうそう.] [そう (.) なんか (.)]] =

(11) 【断片2】における2つの語りの開始部分

① 04A: [[でなんか] (.) <お母さん>なんか:] 鍋を作っ - (.) 作って食べかけの鍋 =

② 29B: [なんか友達もカレー作って: .]

(12) 【断片3】における2つの語りの開始部分

① 06B: [私なんにも用意してなくて:]

- ② 17A: でもなんかうち「すごい」よかったのが: [地震] の一時間前ぐらいに:お
ば] あちゃんから:=

これらの発話が語り開始部分と判断されるのは、これまで交互に実質的発話を話していた状態で、これらの発話の後に語り手の不均衡が生じ、語り手が拡大されたターンのフロアを占めていたことによる。

語りの開始部には共通した特徴がある。語りの開始部をみると、「でも」「なんか」「そう」や「そう」の繰り返し、「でなんか」などのつなぎ語や言葉探しの重複使用、「私」「うち」などの自称詞、「もっと」「～も」など前の語りとの比較・対照・同意などの対応関係を表すものが使用されている。その他に、母音引き延ばし、「も:もっと」などつかえたり、「でもなんかうち」など談話標識の重複使用も見られる。これらの特徴を観察すると、通常の流れを止めるために採られている手法としては、相手の語りへの反応と語りの開始を非常に接近した位置、すなわち同一ターン内で行うというものである。矢継ぎ早に連続して開始することにより、語りのスペースを確保している。このように語り手は、通常の順番交替の仕組みを一時停止してもよいことを相手に承認してもらう必要がある。串田・平本・林(2017)にあるように、会話においては、物語が語られることは決して自明ではなく、物語を語ること自体がまず交渉されなければならない。

6.2 第2の語りの開始部：語りの近似性の表示

それぞれの第2の語りの開始部はそれぞれ以下の言葉で始まっている。

(13) 【断片1~3】における第2の語りの開始部

- (1) そうそうそう. そう (.) なんか (.) 【断片1, 17A】
- (2) なんか友達もカレー作って: . 【断片2, 29B】
- (3) でもなんかうちすごいよかったのが: 【断片3, 17A】

(2) では同類のも(友達「も」), (3) では対比の接続詞(「でも」)である。一つの語りを開始する際にも前の発話との関連を示すことは行われるが、連鎖する語りでは前の発話との関連を示すこと、特にそれ以降語られる語りと同類であるのか、異なるタイプなのかを示すことが非常に重要なこととして行われていると考えられる。後続の語り

当な位置を占めるために、何らかの関連を持った話が語られる。後続の語りは、前の部分の語りへの共感や距離感によって開始されるものであるので、冒頭部にそのための標識を有している。

6.3 第 2 の語りへの反応

6.3.1 第 2 の語りへの理解のはやさ

第 2 の語りと同類であるか異なるタイプなのかは、第 2 の語りが始まった後の早い段階で共有されると考えられる。このことは、第 2 の語りの開始後の受け手の反応によって確かめることができる。これまで挙げた抜粋の第 2 の語りの開始後の受け手の反応(→で示す)を再掲する。

(14) 【断片 1】、第 2 の語りの開始 (再掲)

09B: も : もっとひどいのは : (.) その知り合いで : < 買い換えた > 日に地震で : =

→ 10A: = え : :

11B: あの地デジにしたの. [ね]

12A: [うん] [うんうん]

【断片 1】の抜粋 (14) では、B (同一話者) による第 2 の語りの開始部分 09B であるが、このあと受け手は「え::」と単なる受領ではない、驚きが表示される。「買い換えた日に地震で」だけで、もっとひどい被害であることが受け手に伝わっていることが、受け手の反応によってわかる。これはこの前に語られた語りを前提として、受け手は同類の構造であると予測できるからである。

(15) 【断片 2】、第 2 の語りの開始 (再掲)

29B: なんか友達もカレー作って:.]

→ 30A: うんうん (1.0) やば [カレー-] ? カレーやばっ. =

31B: [蓋して:.]

ここでも、29B 「なんか友達もカレー作って:.」の後、30A 「うんうん(1.0)やば [カレー-] ?」と形容詞「やばい」の語幹「やば」によってこれから語られる事態への反応が

早い段階でなされる。語りを語られる者は笑っていいのかしんみりしていいのかを語りの早い段階で見極める必要がある。開始後の受け手の反応によって、受け手が開始発話で語られる内容を把握していたことがわかる。受け手は語りの開始部以降、それがどんな話か、笑っていいのかしんみりしたらよいか、どうやって聞いたらよいかを読み取ろうとしている。

(16) 【断片 3】、第 2 の語りの開始 (再掲)

17A: でもなんかうち [すごい] よかったのが: [地震] の一時間前ぐらいに: [おばあちゃんから:] =

→ 18B: [うん] [うん] [うん]

19B: = うん =

20A: = めっちゃ 食べ物入った宅急便届いて =

→ 21B: = えよ [かったね]

【断片 1, 2】に比して、【断片 3】では受け手は第 2 の語りの開始後、驚きや感情を表すのではなく、受領の反応「うん」を続けている。【断片 1, 2】で受け手による驚きが早い段階で表明されたのに対し、【断片 3】では説明を受けた後、21B の時点で「えよ [かったね]」と話している。第 2 の語りは、「でもなんか」で導入され、第 1 の語りと対比的なことが接続詞「でも」で示される。対比の場合、同様の内容が続くより予測しづらい可能性があるが、この会話では、大丈夫なことより失敗談や苦労談に共感が示され、良かった話は比較的淡々と受け入れられていた。

7. お わ り に

本稿でみてきた語りは、会話参加者によって即興で作られたものであり、あらかじめ準備されたものではない。語り手が、その状況で達成したものである。第 2 の語り手は、第 1 の語りに対して共感を示したり対比的に示すことで自身の語り (第 2 の語り) を続けていた。連鎖する語りは志向するトピックとして同等のものとなるように組み立てられており、第 2 の語りの開始部分は第 1 の語りとの関連性を示すことでこれから語る語り在那个の時その順番で語られるにふさわしいという正当性を示していた。前の話者に引

き続いて自らの語りを語ることで共感や連帯感を示したり、あるいは距離のある扱い方をするなど、語り手がどのように前の語りを聞いたのかを示している。

本研究は、2018～21 年度科学研究費補助金の助成を得ています（基盤（C）「自然談話構造理解のための、音声・変異動態に基づいた談話標識の研究」研究代表者 甲田直美）。本研究の一部は第 6 回談話分析コロキウム（2014 年 12 月 23 日於・山形テルサ）での口頭発表の成果を含んでいます。会場にてポリー・ザトラウスキー先生（ミネソタ大学）よりコメントを頂戴しました。ここに御礼申し上げます。

【参 考 文 献】

- Holt, Elizabeth (2007). 'I'm eyeing your chop up mind': reporting and enacting. In Holt, Elizabeth and Rebecca Clift (2007), pp. 47-80.
- Holt, Elizabeth & Rebecca Clift (2007). *Reporting Talk: Reported Speech in Interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jefferson, Gail (1978). Sequential aspects of storytelling in conversation. In J. Schenkein (ed.) *Studies in the Organization of Conversational Interaction*. pp. 219-248. NY: Academic Press.
- Jefferson, Gail (2004). Glossary of transcript symbols with an introduction. In G.H. Lerner (ed.) *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*. pp. 13-23. Philadelphia: John Benjamins.
- Karatsu, Mariko (2012). *Conversational Storytelling Among Japanese Women: Conversational Circumstances, Social Circumstances, and Tellability of Stories*. John Benjamins Pub Co.
- 甲田直美 (2014). 「語りの達成における思考・発話の提示」『社会言語科学』17-2, pp. 1-16.
- 申田秀也 (1999). 「共有知識と経験への権限－物語における参与の組織化の一局面に関する試論－」『大阪教育大学紀要第 II 部門』47-2, pp. 59-81.
- 申田秀也・平本毅・林誠 (2017). 『会話分析入門』勁草書房
- Mandelbaum, Jenny (1987). Couples sharing stories. *Communication Quarterly* 35, pp. 144-170.
- Mandelbaum, Jenny (1993). Assigning responsibility in conversational storytelling: The interactional construction of reality. *Text*, 13-2, pp. 247-266.
- Mulholland, Joan (1996). A series of story turns: Intertextuality and collegiality. *Text*, 16-4, pp. 535-555.
- 西阪仰 (2008) 『分散する身体－エスノメソドロジ－的相互行為分析の展開－』勁草書房
- Ryave, Alan L. (1978). On the achievement of a series of stories. In J. Schenkein (ed.) *Studies in the Organization of Conversational Interaction*. pp. 113-132. New York: Academic Press.
- Sacks, Harvey (1974). An analysis of the course of a Joke's telling in conversation. In R. Bauman & J.F. Sherzer (eds.) *Explorations in the Ethnography of Speaking*. pp. 337-353. Cambridge, UK; Cambridge University Press.
- Sacks, Harvey (1992). *Lectures on Conversation*, Blackwell.
- Sacks, Harvey, Emanuel A. Schegloff and Gale Jefferson (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50-4, pp. 696-735.
- Schegloff, Emanuel A. (2000). On granularity. *Annual Review of Sociology*, 26, pp. 715-20.

- Stivers, Tanya (2008). Stance, alignment and affiliation during story telling : When nodding is a token of preliminary affiliation. *Research on Language in Social Interaction*, 41, pp. 29-55.
- Szatrowski, Polly E. (ed.) (2010). *Storytelling Across Japanese Conversational Genre* (Studies in Narrative). John Benjamins Pub Co.
- 高梨克也・竹内和広・森本郁代・伊佐原均 (2004). 「物語を介したコミュニケーションとしての独話」『ことば工学研究会資料』, pp. 47-56.
- Umiker-Sebeok, D. Jean (1977). Preschool children's intraconversational narratives. *Journal of Child Language*, 6, 91-109.
- 山田富秋 (1999). 「会話分析を始めよう」好井裕明・山田富秋・西阪仰 (編)『会話分析への招待』世界思想社 pp. 1-35.
- Yngve, Victor, H. (1970). On getting a word in edgewise. *Papers from the Sixth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 6, pp. 567-578.

転写記号：主な転写記号は次の通りである。Jefferson (2004) が開発し、西阪 (2008) が日本語用に用いた転写方法に基づく。

連鎖

- [(複数の話し手の音声重なっている場合の) 重なりの始まり
] (複数の話し手の音声重なっている場合の) 重なりの終わり
 [[二人の話し手が同時に話し始める
 = 二人の話し手の発話が途切れなく密着していること、一つの発話の中で話と話が途切れていないこと

間合い

- (1.2) 音声途切れている時間 (括弧内の数字は秒数)
 (.) 0.2秒に満たない短い間合い

発話の表出上の特徴

- :: 音が引き延ばされている (数が多いほど長く引き延ばされている)
 - 言葉が途中で途切れた
 . 語尾が下がって区切りがついたこと
 , イントネーションが続いていること
 ? 語尾の音が上がっていること
 h 呼気音
 h. 吸気音
 語 h 語 語の中に呼気が含まれる
下線 音の強さは下線によって示される
 °° 音が小さい
 ¥¥ 発話が笑いながらなされているわけではないが、笑い声でなされている場合
 >< 発話のスピードが目立って速くなる部分
 <> 発話のスピードが目立って遅くなる部分
 (()) その他の注記

The Stories in the Series

KODA Naomi

Analyzing series of stories that were told by different storytellers in the same conversation, this study demonstrates that the story in the series achieves collegiality (Mulholland, 1996 ; Szatrowski, 2010 ; Karatsu, 2012). This study focuses on the construction and design of the stories in the series in Japanese conversations, including the participants who went through and shared the experiences of the 3.11 earthquake in Sendai. Once one participant picks up the earthquake as a topic, the next teller shows the resonance, and takes story turns and from them into a series. Especially when the topic comes to the hardship of earthquake experience, participants shared the feeling such as laugh and angry. The earthquake topics seem to be the spring gushing out from the stock of experience. Tellers of the second or consecutive stories nicely pick up the stories which agree with the previous stories from their stock of earthquake stories to achieve a degree of collegiality in their talk.